ＨＩＶ感染症に関する看護大学生の意識変化

―講義前後の比較―

林　　かおり[1]　藤　野　文　代[1]　野々山　未希子[2]

（2000年９月29日受付，2000年12月20日受理）

要旨：今後の看護学生への感染症教育のあり方を明らかにするため，医療従事者となる看護学生56名を対象に，Human Immunodeficiency Virus（以下HIVとする）感染症に関する講義を行い，前後でその認識にどのような変化がみられるかを調査した。

割合に関する検定（Ｚ検定）を行い結果として以下のようになった。

①HIV感染症は恐ろしくて危険な疾患（P<0.05で有意に講義後減少），②正しい知識があれば恐れることはない疾患（P<0.01で有意に講義後増加），③特別視してしまう疾患，④他の疾患患者と同等に扱うべき（両回答共講義前後の有意差は認められなかった）であった。又講義後，⑤看護学を学ぶ者として疾患や患者に対して正しい知識をもつこと，⑥正しい知識を一般に伝える役割が自分達にあるという社会的な面に目を向けられた回答が存在した。

以上の結果より，HIV専門看護婦による講義は効果があったと考察できた。今後もHIV感染症のような特色のある疾患を理解するための講義と工夫が必要と考察された。

キーワード：HIV感染症，感染症看護論，看護大学生，意識調査

Ⅰ．はじめに

現在HIV感染症及びその患者に関する多くの事項が明らかにされ，医療の場に限らず正確な知識も一般社会に浸透している[1),2),3),4)]。しかし，依然としてHIV感染症及び患者に対する偏見・差別問題が報道され，完全に恐怖や混乱が除去されていないということがうかがわれる[5)]。看護学生や医学生，又看護婦は一般的に他分野専攻の学生よりもHIV感染症に関して多く知識を持っていると報告されている[2),5),6),7)]。HIV感染症及び患者に関する様々な情報が急速に増加した現在，現状の看護学生の知識及び認識レベルには変化があるであろうか。本研究では将来，医療従事者としてHIV感染症患者と直接的に関わる立場，又は知識を一般住民に啓蒙する立場となる看護学を学ぶ大学生を対象として調査した。３年次学生がHIV感染症及び患者に関してどのような考えを持っているかを明確にし，講義前後の調査結果より今後，学生へどのような点を考慮し，より効果的な教育が必要かを検討することを目的とした。

Ⅱ．対象と方法

１．研究対象：本学看護学専攻，「感染症看護論」を選択した３年次学生，56名。学生の教育背景は，すでに「基礎医学総論」において基本的なHIVウイルスに関する微生物学的知識を習得していた。

２．研究期間：1999年12月11日から12月18日。

３．研究方法：「感染症看護論」講義枠でHIV感染症に関する事項を共同研究者であるHIV専門看護婦による講義を設けた。講義はHIV感染症を専門に受け入れているＫ病院に勤務している看護婦により行われた。講義内容はHIV感染症患者の治療変遷と現状。関わり方の紹介。看護婦としてHIV感染症患者を看る姿勢・感染予防のテクニック。HIV感染症患者の事例紹介とその看護ケア。今後HIV感染症患者へのケアへの改善点・課題であった。この講義前後に次に示す事項に関して，自由記載による意識調査を行った（資料-１）。回答に際しては，一項目につき一番重要視し

[1]群馬大学医学部保健学科看護学専攻　[2]国立国際医療センター　エイズ治療・研究開発センター
*別刷り請求：371-8514　群馬大学医学部保健学科

ている事一つを記載することと条件付けた。それぞれ質問項目から得られた回答は自由記載のため表現は様々であった。内容的に同義の回答を分類し，各回答は全回答における傾向を検討した。なお，今回の講義でとり上げたHIV感染症の感染経路は薬剤及び性行動によるものと特別に区別しなかった。広義でHIV感染症としてとり上げた。

4．回答値の検討：回答の傾向より学生の意識状況を検討した。分類した回答結果は講義前後全回答から割合に関する検定（Z検定）を施行し有意差（$P<0.01$, $P<0.05$）を求めた。

5．講義の有り方の検討：回答値より，今後「感染症看護論」において，どのような教育・啓蒙を行えば効果があるかを検討した。更に，医療従事者となる学生に対して今後HIV感染症に関する教育を効果的に行うにはどのような事が必要かを検討した。

6．研究の倫理的配慮：講義内で挙げられ提示された事例患者に関して，患者には教育のために紹介させて欲しい目的をあらかじめ説明し了解を得た。学生にはアンケート調査依頼と，得られた回答に関する扱いは調査・研究の目的を説明し，同意を得た。同時に，得られた回答結果は今後の講義への参考と研究意外には使用しないことを説明し，理解と同意を得た。

Ⅲ．結　　果

アンケートの有効回答率は講義前後共に100％であった。

1）講義前後のアンケート結果は以下の通りであった（表1）。

（1）HIV感染症及び患者に関して現在どのように考えているかは以下の結果であった。①怖くて危険とい

—資料-1—　「感染症看護論」　HIV感染症に関するアンケート用紙

HIV感染症の講義に関するアンケート

◆ 各項目に自由に自分の考えを記載してください。ただし回答は項目につき一つのみ現在一番に考えている事項を記載してください。
◆ 無記名で結構です
◆ アンケートの結果は今後の講義内容に生かし，後日皆様に報告致します

Ⅰ．HIV感染症及び患者に関して現在どのように考えていますか
（　　）

Ⅱ．看護学を学ぶ立場の者としてHIV感染症の予防方法はどのようなものであるべきと考えますか
（　　）

Ⅲ．講義前後でHIV感染症及び患者に関して自分の考え方に変化がありましたか
【どのような考え方が変化したかを具体的に記載してください】
（　　）

Ⅳ．講義に関して又HIV感染症及び患者ケア等に関して質問があれば記載してください
（　　）

うイメージ。講義後有意に減少した（P〈0.05)。②差別してはいけないと思うが特別視は避けられない。講義前後有意差は認められなかった。③予防知識が正しければ恐れることはない。講義後有意に増加した（P〈0.01)。④他の疾患患者と同様に接するべきである。講義前後有意差は認められなかった。

（2）看護学を学ぶ立場の者としてHIV感染症の予防方法はどのようなものであるべきと考えるかに関しては以下の2項目に分類された（表-2)。
①疾患や患者に対して正しい知識を持つこと。
②血液・体液及び注射針といった医療機器の取り扱いに注意しなければならないであった。両回答共，講義前後に増減は有るものの，有意差を得るには至らなかった。

（3）授業前後でHIV感染症に関して考え方が変化したかに関しては次の結果であった（表-3)。
内容として，①危険な疾患，②社会的問題の疾患，③いつ自分の身に起こるかわからない疾患，④正しい知識を持ち，社会に伝えていく必要がある，であった。

表1　HIV感染症及び患者に関して現在どのように考えているか

単位：人数（%）

回答項目種類	講義前	講義後
1．怖くて危険というイメージ	26* (46.4)	11* (19.7)
2．差別はしてはいけないと思うが特別視は避けられない	8 (14.3)	6 (10.5)
3．予防知識が正しければ恐れることはない	7 (12.5)	27** (48.7)
4．他の疾患患者と同様に接するべきである	15 (26.8)	12 (21.1)

(*P〈0.05)
(**P〈0.01)

表2　看護学を学ぶ立場の者としてHIV感染症の予防方法はどのようなものであるべきと考えるか

単位：人数（%）

回答項目種類	講義前	講義後
1.疾患や患者に対して正しい知識を持つこと	25 (45.4)	30 (54.7)
2．血液・体液及び注射針といった医療機器の取り扱いに注意しなければならない	31 (55.4)	26 (46.4)

表3　講義前後でHIV感染症及び患者に関して自分の考え方に変化があったか

単位：人数（%）

回答項目種類	講義後
1．危険な疾患というイメージは変わらない	21 (36.8)
2．社会的な問題のある疾患	19 (33.8)
3．いつ自分の身に起こるかわからない疾患	9 (16.1)
4．正しい知識を持ち一般社会に伝えて行く必要がある・その役割がある	7 (13.3)
有効回答数	56

Ⅳ．考　察

1）HIV感染症及び患者に関して現在どのように考えているかに対する回答は，①HIV感染症は怖くて危険な疾患であるという考えは講義後，数字的には減少したがやはり完全に，このイメージは無くならなかった。潜在的イメージとしてHIV感染症は治療法が無い疾患，つまり恐ろしい疾患に繋がるからであろうと考えられた。広瀬らは，致死的な病気の犠牲者には，常に悪しきイメージとその結果としての偏見がつきまとう。一度確立されたイメージや偏見は，それを意識的に変化させようとしない限り容易には変化しない[8]と述べている。反対に，この考え方が講義前より26%も減少していることは我々の企画した講義の効果があったものと考えられた。一方，不安や恐れがあるほうがHIV感染症をより身近な問題としてとらえることができ，感染防止の面からも有効であるとされている[5]。不安は過度にあると偏見や差別に繋がり問題ではあるが常に自分自身に注意を促し感染予防に繋がるとも考えられた。②差別してはいけないと思うが特別視は避けられないという考え方も講義後は減少している。しかし，5%のみ減少したに留まった。基本的で正しい知識があってもHIV感染症は特別な疾患と認識されているものと考えられた。宗像らは，知識量がたとえ増加しても感染者に対する人格イメージが良くなったり，拒否的な態度はなくならないと述べられている[9]。このような傾向があるために我々の得た結果となったと考えられた。③予防知識が正しければ恐れることはない，については講義後半数近くの学生が回答していた。HIV感染症及び患者に関して恐怖や特別視の考えを持っていても，正しい知識があれば対処していくことができるということと考えられた。この結果は，正しい知識を講義で修得することにより無駄な恐怖心は

減少し，根拠を持って対応できると考えられた。講義後，冷静に受け止めることができたのではないかと考えられた。④他の疾患患者と同様に接するべきであるという回答は講義前後供に差はなかった。特別視をしてしまうという回答と矛盾はあるが，患者を看る姿勢として3学年として確立した認識があると考えられた。看護を学ぶ学生はHIV感染症に関する知識は一般的に高く，看護に携わるという自覚から一般に，病気に対する偏見は少ない，少なくともそれを持つべきではない。その理由は同年代で他分野専攻の若者に比して身体を客体として観察したり，意識化したりすることは学校という職業訓練の場でなれていることもあると言われている[2),5),10)]。本学の学生の意識も差異はないのではないかと考えられた。

2）看護学を学ぶ立場の者としてHIV感染症の予防方法は何かに関しては①HIV感染症に関する正しい知識を持つは，講義前後回答差は見られなかった。正しい知識の必要性は常に認識されているものと考えられた。②血液・体液及び注射針といった医療機器の取り扱いに注意しなければならないについての回答は講義前より講義後の回答がわずかであるが減少していた。重要な事項であるが減少していたのは①の正しい知識を持つことと同一視しているのではないかと考えられた。稲見らは，異なる学年の看護学生にHIV感染症の知識調査を行い，学年があがるほど正確な知識を習得していたと報告した[6)]。学年が進むにつれ基礎看護学，内科学，微生物学等などでHIV感染症に対する講義を受け知識が豊富になったことが理由とされている[6)]。本研究の対象学生は3学年なので講義前よりHIV感染源・注意事項の知識は多少なりともあったものと考えられた。そのため講義前後に数値的な変動があまり認められなかったものと考えられた。今後，2年，4年生の学生に継続し検討していく必要がある。

3）講義前後でHIV感染症に関して考え方が変化したかに関しては危険な疾患という回答が多く1），2）に関する回答と関連しているものと考えられた。社会的問題の疾患という回答はHIV感染症の話題性・問題意識，疾患の持つ特徴が関連しているものと考えられた。いつ自分の身に起こるかわからない疾患という回答は，HIV感染症が蔓延し，日常の生活において感染する危険性が全く無いとはいいきれない。今後の職業の特徴としてHIV感染症患者と関わる機会が多いこと，医療行為から感染する危険性があることが考察された。後藤らは，看護に必要な知識に関する設問の正解率が医学関係の媒体が加わることにより増加するため，研修会や講演会の必要性を掲げている[3),7),10),11)]。このことと同様に正しい知識を身につけるために我々も機会ある毎に今回施行したようなHIV専門看護婦の講義を取り入れ意識付けていくことも大切であると考えられた。又，修得された知識は学生も考えているように一般の人々が健康で安全な生活を続けて行くうえでも重要な知識であると考えられた。一方，学生ばかりではなく，知識を提供する側にも学生と同様に定期的な教育が必要とされている[3),7),10),11)]。学生に正確な知識を提供していく役割を担うものとしてHIV感染症に関する研修会等に参加することは重要である。又常にその機会を逃さぬよう情報を得る努力をしなければならないと考察された。

V．結　語

我々は「感染看護論」を選択している3年次看護大学生に対してHIV感染症及び患者に関する認識変化をHIV専門看護婦による講義を通して現状把握した。その結果を検討し以下のことが明らかになった。

1．講義後怖くて危険という疾患に対するイメージはかなり減少した。HIV専門看護婦による実際の臨床における状況を理解する機会を得られた。定期的にこのよ うな講義形式を取り入れ現実を知る機会を得る必要がある。

2．講義後情動面においてHIV感染症及び患者に対するマイナスイメージは減少していたが完全には無くなっていなかった。直接患者に接する機会があり，情報源にもなり得る看護婦が正しい知識と認識，偏見のない態度を身につけることは極めて重要である。知識と情動のバランスをとる必要性を示唆する教育内容も検討の必要性がある。

3．近い将来医療に携わる学生は，専門職としてHIV感染症に対する正確な知識と，感染症患者に対する理解を持ち対応していかなければならない。そのために教育の内容や，方法を検討していく必要がある。

4．感染管理・予防方法は医療の進歩にしたがい日々進化していくものである。又感染防止対策は万全ということはなく，常に現状を把握し，その時に合った事項を正確に学生に伝えていく必要がある。

Ⅵ. 終わりに

HIV感染症及び患者は年々増加してきている[1),11)]。看護者が実際にこれらの患者にケアを施行する機会も珍しくはなくなった。HIV感染症は医学的な点に留まらず，差別や偏見，患者のプライバシーに関する人権問題等も含んでいる。我々看護者には正確で科学的な知識や認識に基づいた適切なケア能力，患者を特別視しない情動面の訓練能力を身につけることが求められる。そのために，看護学生に対して知識ばかりではなく，情動面・人間性に働きかける何らかの教育方法を更に検討していく必要がある。又，HIV感染症に関する様々な情報は常に更新され変化するものである。この変化に合わせた教育方法を常に検討・評価すると供に，その時学生の知識や認識が変化しているかを把握するために実態調査を今回の研究以上に更に密な項目を考案し，継続し行うことは極めて意義あることと考える。

Ⅶ. 文　献

1）国民衛生の動向・厚生の指標．厚生統計協会，東京．2000；47(10)

2）百々雅子．「現実としてのAIDS」に迫る授業．看護教育．1998；39(10)：815-820．

3）J. Kinsman, S. Harrison. Implementation of a comprehensive AIDS education programme for schools in Masaka District, Uganda: AIDS CARE. 1999；11(5)：591-601.

4）HIV感染症ガイドブック99．国立大学保健管理施設協議会エイズ特別委員会，東京．1999;14-37.

5）平田ナツ子，他．看護系短期大学生のエイズに対する意識．聖マリア学院紀要．1997；12：89-98．

6）稲見すま子，他．看護学生・医学生のエイズ問題の認識および意識に関する調査．臨床看護．1992；18(2)：268-275．

7）橋爪永子，他．三重県の看護婦におけるエイズに関する知識と態度の変化．日本公衆衛生誌　1995；42(12)：1054-1060．

8）広瀬弘忠．エイズの認識課程―イメージと偏見のダイナミズム．現代のエスプリ．1993；316：93-103．

9）宗像恒次，他．日本のエイズ．東京：明石書店，1994;107-125．

10) Trishia Hancock. A Comparison of HIV/AIDS Knowledge Among High School Freshmen and Senior Students: JOURNAL OF COMMUNITY HEALTH NURSING. 1999；16(3)：151-163.

11) Sara Dubik-Unruh, MS. Peer Education Programs in Corrections: Curriculum, Implementation, and Nursing Interventions: JOURNAL OF THE ASSOCIATION OF NURSES IN AIDS CARE. 1999；10(6)：53-62.

Changes of Awareness of HIV Infection among Nursing Students

—Before and after the Lecture—

Kaori HAYASHI[1], Fumiyo FUJINO[1] and Mikiko NONOYAMA[2]

Abstract: HIV infection has recently been much reported through mass media and the general public are informed of it. Provision of accurate information has reduced confusion and fear about HIV infection. The lecture on "nursing for infectious diseases" has provided the students with an opportunity to learn from the expert nurse in the field of HIV infection. The authors conducted the questionnaire survey to 56 students before and after the lecture to identify the awareness among students concerning HIV infection and studied the elements to be included in the education of health professionals.

The results were shown below. The numbers in the parenthesis represent before and after the lecture, respectively. ①HIV infection is a fearful and dangerous disease (46.4%, 19.7%), ②I take it as a special disease (14.3%, 10.5%), ③there is nothing to fear about when we have accurate knowledge on it (12.5%, 48.7%) and ④it should be treated in the same manner as other diseases (26.8%, 21.1%). The authors found other answers of more broad and social nature after the lecture such as ⑤it is necessary for nursing students to have accurate knowledge on the disease and the patients and ⑥nurses and nursing students have a responsibility to disseminate accurate information.

Through the survey, the authors were convinced that the lecture given by an HIV expert nurse was informative and effective. It is indicated that lectures should be designed so that it can facilitate better learning of diseases of special characteristics like HIV infection.

Key words: HIV infection, lecture on nursing for infectious diseases, nursing students, awareness survey

---

[1] Department of Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Gunma University
[2] AIDS Clinical Center, International Medical Center of Japan
*Reprint address: Gunma University School of Health Sciences, Maebashi 371-8514, Japan